

入来院家所蔵平氏系図について (上)

山口隼正

On the Genealogy of the Taira Clan owned by the Irikin Family (Part 1)

Takamasa YAMAGUCHI

入来院家とは、薩摩渋谷氏（中世、関東の相模国から南九州の薩摩国に下向・土着した渋谷氏）のうち薩摩国入来院（現、鹿児島県薩摩郡入来院）に下向したものを指し（入来院渋谷氏）、やがて南九州で守護家島津氏に次ぐ大族となる。有名な入来院家文書をのこし、朝河貫一（米国エール大学教授、近代日本が生んだ最大の国際的歴史家）の代表作『The Documents of Iriki（入来院文書）』（日英両文合冊。一九二九年、エール大学出版会・オックスフォード大学出版会発行）の母体となった史料群で、日欧封建制比較研究にとって最適な素材である。『入来院文書』（日英両文）は、戦後、一九五五年（昭和三〇）に我が国で再刊（増訂）された（日本学術振興会発行）。入来院家文書の本体は、やがて六六年、現地入来院町の入来院家（当主入来院重尚氏）を離れ、東京大学史料編纂所の所蔵となった。史料編纂所では、最近、九八年（平成一〇）に企画展「入来院文書の世界」を開催し、二〇〇〇年には『入来院家文書 CD-ROM版』を編集・製作し、入来院家文書の原本を画像として提供している（紀伊国屋書店発行）。

そもそも入来院家文書は、一九一九年（大正八）の朝河貫一、二五年の史料編纂所（龍肅編纂官、のち所長）による現地での史

料調査以来、冒頭の「一番」〜「八番」は欠けており、戦後の再刊『入来院文書』においては、「九番」〜「廿六番」、「三十三番」〜「三十六番」が収録されておる。かねて気に懸かっていた。

三年前、九八年の夏のこと、史料編纂所の企画展に先立ち、同僚とともに入来院家（入来院重尚・重弘父子、鹿児島市唐湊在住）を訪ね調査した結果、これまで全く未紹介だった「一番」〜「五番」が現存し（なお「六番」は既に史料編纂所所蔵だと気付く）、「廿九番」も所蔵されていた。一方、寺尾家文書（寺尾家も同様に渋谷一族）は、その中世文書が再刊『入来院文書』に収録された後、現地入来院町を離れ、全て鹿児島大学附属図書館に入ったが、その近世部分に『御文書改帳』一冊（宝永四年、一七〇七）が含まれている。この『御文書改帳』は、「一番」から「卅七番」に分けて文書名を配列した文書目録だが、これについて、先年、五味克夫氏が着目、これは寺尾家の文書目録ではなく、実は入来院家の文書目録であると指摘した（「入来院家文書目録小考」、鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』二二号、昭和六〇年）。今回の入来院家調査の詳細は、図録『入来院文書の世界』（史料編纂所、一九九八年一月）の総説「入来院文書について」で記した。

ここに、『御文書改帳』（目録）と入来院家現蔵文書（ないし史料編纂所所蔵文書）との対照表を示してみよう。

あり（以下①②とする）、いずれも卷子本だが、このうち①は、清和天皇に始まる源氏の系図で、実は島津氏につながる系図であり、②の方は、はじめに院や鎌倉將軍などの「次第」（順序）が示され、ついで桓武天皇に始まる平氏系図（平氏―北条氏―渋谷氏）で、薩摩渋谷氏（入来院氏など）につながる系図である。ともかく①は、まさに『御文書改帳』にいう「二番」のうち「源家系図、絹表紙」であり、②の方は、「平家系図、紙表紙」に当たる。

No.	『御文書改帳』（目録）	入来院家現蔵文書（原物）	現存
1	当家系図巻 但内箱時絵御定紋付黒漆紫縮緬袷不洗包、外家眞溜塗箱日野浅黄不洗包 源家平家之系図式巻	平姓入来院氏系図	○
2	内源家系図絹表紙 平家系図紙表紙 但黒塗時絵箱入		○
3	神代人皇系図二巻 内巻ハ絹表紙紙桐溜塗箱入 古系図巻	本朝皇胤紹運録	○
4	但上下切レテ不見得、黒塗箱入		○
5	当家系図草案巻 但黒塗箱入	系図草案一通 (箱蓋書)	○
6	当系図之写巻 但備御覽候写也	入来院家系図（入来院家文書二十六、史料編纂所現蔵）	○
29	日本帝皇年代記巻冊	日本帝皇年代記 廿九番	○

要するに一番〜六番は系図類で、いずれも未刊である。これらを通覧したが、特に二番、四番、五番に興味をいだいた。ここで考察しよう。

二番は、現在、入来院家には付箋「式番」が付いた系図が二つ

図草案一通」「（朱書）五番」が貼られた「黒塗箱」がのこっている。現在、この「五番」箱は空箱だが、表裏両面に記事があり、書き込みが多く、特に上下が焼損した系図一巻がある。付箋はないが、通覧したところ、記事内容からして、実は右の「式番」②

四番とは、付箋「四番」をもつ一巻であり、現状では前欠で、最後に「宝徳二年^壬三月吉日 重梁書之」（宝徳四年^壬一四五二）とある。『御文書改帳』に「古系図巻 四番、但上下切レテ不見得」とあるのに、まさに対応しよう。この「四番」は、前欠の状況だが、「式番」の②に直接つながる北条氏系図だといえる。即ち「式番」の最後の尾から名越氏（執権北条義時の次男朝時に始まる）の系図が始まっているが、糊代―紙継目が剥落してしまつたため、現状になったといえる。『御文書改帳』の成る宝永四年（一七〇七）の段階では、既に斯様な状況だったといえよう。実際、糊代部分のこり、双方の残画箇所（文字、系線）が直接合致するし、ともに同筆だし、料紙の寸法も一致する（タテ三〇、三センチ）。そして五番だが、現在、入来院家に、表面に題箋「系

と「四番」の草案（下書き）だと確かめられ、これこそ「五番」だといえる。これは、元来、「五番」即ち「系図草案一通」として、この「黒塗箱」に入っていたのであろう。因みに寸法の面でも、この系図（五番）はタテ三一センチ＋α（上下焼損分）、箱蓋（「系図草案一通」「五番」）はタテ三五、三センチ（内側）、箱の本体はタテ三四、四センチ（内側）であり、符合する。

とにかく、これらは詳細な系図で、興味をそそった。全国的に見ても、真に珍しいものだといえよう。「五番」（草案）を書写（清書）したものが、一応、「式番」②と「四番」である。先ず「式番」②と「四番」の全文を筆写し、あらためて「五番」の本文と対照してみた。「五番」からの書写（転写）に際して、省略（官位などの注記）、脱落、誤写（文字、系線など）があり、また配列が錯綜して、意味不明になった箇所も多々ある。

あらためて「五番」の全文を筆写してみた。これが原形（オリジナル）だといえるので、全文を提示、紹介するが、以下、前以て若干コメントしておこう。

A. 表題

「五番」の表題は、焼損のため黒ずんで見にくいだが、あらためて原物に接するに「□氏系図」と判読でき、直接表紙に書かれている（書外題）。もちろん「平氏系図」と書かれたのだろう。現在、「式番」②の表紙も見にくいが、付箋「式番」の左側に題箋が貼られ（貼外題）、その上に「□□図」と見える。

B. 構成

この系図「五番」は九紙からなり、表裏両面に書かれているが、

山口・入来院家所蔵平氏系図について

表面（オモテ）は、冒頭に院次第（高倉院→後二条院、「当今」）、「將軍家次第」（源頼朝→久明親王）、「御後見次第」（執権北条義時→高時、連署北条時房→貞顕）、「六波羅」次第（北方北条泰時→、南方北条時房→維貞）があり、ついで「平朝臣」以降、桓武天皇に始まる平氏系図である。この平氏系図は、平氏（清盛など）→北条氏（鎌倉執権家各流）→薩摩洪谷氏（入来院氏など）の記事が主流だが、その間、千葉氏・秩父氏・三浦氏など関東平氏の系図もあって興味を増す。なお「御後見次第」と「六波羅」次第の記事は、配列上、聊カラフなので、書写（転写）に際しては錯綜（混乱）しかねない。後掲「図1」「図3」参照。

この裏面（ウラ）は、執権家北条氏の各流についての、実に詳細な系図（草案）である。

この系図「五番」は、真に詳しい平氏系図だといえ、一般に知られている『尊卑分脈』（四、『国史大系』六〇巻下）、『続群書類従』（六輯上）、前田家本『諸家系図』（原本仁和寺所蔵）、正宗寺本『諸家系図』や、先年紹介された野津本『北条系図』（皇學館大学現蔵福富家文書、注1）などの記事と比較対照するに、引けはとらない古系図で、互いの相違点が提示され、いろいろ興味ある問題も出てこよう。

C. 成立、書写

この系図「五番」は、結論からいえば、鎌倉末期、一四世紀はじめに作成され（成立）、室町中期、一五世紀半ばから書写されといった。

記事から検討してみよう。冒頭の院次第における「当今」（「今生」）とは、「後二条院」の次、花園天皇だといえ、その在位は

一三〇八〜一八年（延慶一〜文保二）である。「御後見次第」において、執権として最後に見える北条「高時」（得宗）の在職は一三二六〜二六年（正和五〜嘉暦一）であり、連署として最後に見える「貞顕」の在職は一三一五〜二六年（正和四〜嘉暦一）である。そして「六波羅」次第で最後に見えるのは「維貞」であるが、そこに「南正和四九上洛」と注記があり（「図1」参照）、実際、彼の六波羅探題南方としての在職期間も正和四年（一三二五）九月からである（元応二年＝一三二〇まで）。さらに系図の記事・注記から時期（年月日）を記してあるものを拾ってみるに、右の維貞の六波羅就任時の注記「南正和四九上洛」が最も時期が下ったもので、遡って次には宗宣（大仏流、維貞の父）に対する記事「正和元（一三二一）六十二卒」とか、貞時（得宗）に対する記事「応長元（一三二一）六十六卒」がある。これらの年次からすると、一応、この系図「五番」は一三一六（正和五）〜一八（文保二）の間に作成、成立したといえよう。

薩摩洪谷氏については、入来院氏は「重基」（四代）まで（「図2」参照）、祁答院氏は「行重」まで記載され、当時、かれらは文書を授受し、それぞれの当主として活躍している。この系図「五番」は、薩摩洪谷氏の系図の起点になろう。

それから書風とか料紙・紙質とかだが、殊更に、この系図を時代の下った新しいものだと疑う必要はなからう。この系図「五番」の原物自体、当時、一四世紀前半のものかも知れないし、いくらか新しいものとしても、系図「四番」の奥書「宝徳四年（一四五二）三月」よりは古いといえる。しかも全文同筆で通した、とにかく珍重な古系図である。

以上のような系図「五番」だが、それが、室町期、一五世紀半

ばになると書写されている。イ系図「貳番」②と「四番」（入来院家所蔵）、ロ都城島津家所蔵「平家系図」、ハ山口家文書「平氏系図」（鹿児島県立図書館寄託）に出会ったが、これらは、いずれも系図「五番」を元本にしていると指摘できる。ロハとも同様に未刊（補注1）、卷子本だが、これら全体を通覧するに、一応、ロハはイからの転写だといえる。なおロハは、イの場合（奥書「宝徳四年」云々）とは違って、奥書はもたない。

イについては、既に述べたように、四番の奥に「宝徳二年（一三五二）三月吉日 重梁書之」とあって、これ（貳番②と四番）は、宝徳四年（一四五二）三月に系図「五番」を書写したものと見える。通覧して、相互の記事内容の異同について若干示そう。

○「將軍家」次第において、惟康親王がイでは見えない（ロでも同様）。脱落している。特に「御後見次第」の部分は、記事が錯綜しているため、イではズレた箇所が目につく（ロでも同様）。項目名「六波羅」（次第）が、イでは見えない（ロでも同様）。書写（転写）の際、見落したのだろう。後掲「図3」参照。

○この系図「五番」で平氏系図は、はじめに見出し「平朝臣」があって、「桓武天皇―葛原親王―」と続いていく。ところが、イでは、見出し「平朝臣」の前に「正「延」暦元年五十大御門、光仁天皇王子」と付加記事があるが、これは「桓武天皇」に対する注記であって、この系図を見辛くしている（ロも同様）。後掲「図3」参照。

○薩摩洪谷氏の部分だが、入来院洪谷氏（入来院家）の箇所において、このイ（系図「貳番」②）では、重基（四代）の次に重勝（五代）を追加し（重基―重勝、注2）、致重（宗重）

の次に女子二人（辰童女・弥陀童女姉妹）を、重知の次に子息二人（重勝・重興兄弟）を追加している。これらの箇所、ロハも同じである。「図4」「図5」参照。

○イのみ奥書（「宝徳二年^壬三月吉日 重梁書之」）をもつが、そこに見える「重梁」即ち書写者は、恐らく薩摩渋谷氏の一人だろう（「重」は渋谷氏の通字）。彼は、系図など、他の史料では一向に見当たらないが。

○現在、系図「五番」は、特に上部と下部が焼損により判読困難になっているが（文字、系線など）、イロハは、そうではなく、上部・下部の該当箇所も殆ど明確に記されている。系図「五番」が火災―焼損に遭ったのは、とにかく書写本イが成った宝徳四年（一四五二）三月以降だといえよう。

次に口都城島津家所蔵「平家系図」で（表題として「□家系図」と見える）、これはイからの転写だが、誤写など細かな点は別として、イとの主な相違点を挙げよう。何しろ薩摩渋谷氏の部分において、見出しとして各支流名（「東郷」「祁答院」「入来院」「高城」）を付け、うち祁答院氏は、従来、「行重」までだったが（「五番」およびイ）、これに続いて「重実」以下八代が追加されている（行重―重実―公重―重茂―延重―久重―徳重―重度―重貴）。ある時点で、祁答院氏と都城島津家と縁ができ、この系図口が都城島津家に相伝されたのかもしれない。後掲「図5」参照。

そしてハ山口家文書「平氏系図」で、表紙に題箋「山口家文書系図 平氏―北条氏―渋谷氏」が貼られている（貼外題）。本文を通覧するに、これもイからの転写だといえるが、何しろ冒頭の諸次第（院次第―六波羅次第）の部分が全く書写されていない（省

略）、系図においても省略・脱落の箇所も目につき、最後の北条氏系図草案（「五番」ではウラ部分）について金沢氏（実泰―実時―）以降は書写されていない。薩摩渋谷氏の部分を見るに、山口家は入来院家の支流とあって、系図イでの「政重」（「公重」―入来院家二代の甥）に続いて「重次」（山口家二代）以下四代までを書き加え（政重―重次―惟重―重武）、入来院家嫡流についても、系図イでの「重勝」（五代）に続いて十代の時期までを追加している（重勝―重門―重頼―重長―重茂―重豊など）。

以上、鎌倉末期に成立（作成）した系図「五番」を元本（祖本）にして、室町中期の宝徳四年（一四五二）に書写本イ系図が成り、再書写（転写）したロ系図、ハ系図が成ったといえよう。そして元本たる系図「五番」は、イ系図がなる宝徳四年三月以降に火災―焼損にあったといえよう。

さて、ここで系図「五番」の本文を紹介しよう。紙数の都合上、今回はオモチ（表面）のみとする。次のことを了承いただきたい。

○朱書（文字、合点など）の箇所では、その旨を示した。若干ながら挿入や抹消の箇所があるが、それらは整えて本文の中に流し込み、挿入符や抹消符は用いなかった（従って挿入や抹消の跡は残さない）。印刷上、煩雑になるからである。

○紙継目は、上欄に点線と算用数字(1)〜(9)で示した。この系図「五番」は、九紙(1)〜(9)から成り、各紙の長さ(ヨコの寸法)は、(1)のみ二八、五センチで、(2)以下は何れも約五一センチである。

○特に最上部と最下部は焼損のため見辛い箇所が多いが、原物を点検し、判読困難な場合は、本系図「五番」のウラ（北条系図草案）、系図イ（「式番」②）や諸系図により推定し、適宜、（注）に示した。

(表題)
〔平〕
〔□〕氏系図

〔高〕倉院^{治十三} 安德院^{治三} 後鳥羽院^{治十五} 土御門院^{正治元 治十二} 順德<sup>〔院〕
□^{治十二}</sup>

〔四〕条院^{天福元 治十} 後嵯峨院^{寛元 治四ケ年} 富少路院^{治十一 實治}

〔龜〕山院^{文應元 治十五} 大学寺院^{建治 治十三} 持明院^{正應 治十一} 新院^{正安 治三}

〔後〕二条院^{乾元 治六} 當今 將軍家次第

富小路殿 延慶 治十八年 賴朝卿^{治承四 賜院宣} 賴家卿^{正治二 治四ケ年} 実朝公^{建治三 治十七} 二位^{〔殿〕}

後深草院 賴経公^{嘉禄元 廿一年} 賴嗣公^{寛元二 治九年} 宗尊親王^{建長四 十五年} 惟^{〔康親王〕}

二 禪林寺 龜山院 久明親王^{正應二 治十年}

三 大学寺院 御後見次第

四 持明院 義時^{自元久二 至承久三 十七年} 泰時^{十九年 元仁元} 経時^{四ケ年 自仁治三 至寛元三} 時頼^{十年 自寛元四} 政村^{十九年}

五 新院 時房^{至仁治三} 重時^{十年} 長時^{九ケ年}

六 後二条院 時宗^{文永元 于時十四 十七年} 時宗 貞時 師^{〔時力〕}

七 今生 政村^{上判 至同十年} 義政^{自文永十 五ケ年} 業時 宣時 時^{〔村力〕}

宗宣 基時 貞顯 貞村 貞顯 高時

(2) (1)

六波羅 泰時承久 時房 重時 (實) 長時 寛治元 時茂 康元 時輔 文永元 義宗 駿州 時村

時房南 時氏 時盛

久時 宗方 基時 貞房 貞顯北 師村北 時國南

盛房 宗宣 時信 師村移北方 維貞南

南 南正和四九上洛

平朝臣

桓武天皇 — 葛原親王一品式部卿 — 高見王 — 高望(朱) (王力)

上総介 始賜平姓

良望 鎮守府將軍 從五位下

貞盛 陸奥守 從四位下
左馬助 丹波守
武藏上野
号平將軍
秀郷一雙

貞盛子 維政(注3)
一本

維衡 常陸守 從四位下
佐渡伊勢
上野下野
出羽致賴一雙

清盛 藏人 中務小輔
兵衛佐 肥後安木
幡磨大宰大貳
正三位 宰相

左衛門督 別當
中納言 兵部卿
大納言 内大臣
太政大臣 從一位
兵杖 輦車 准三宮

正度 越前守 正四位下
出羽齋官頭

正衡 讚岐守 出羽守從四位下

正盛 讚岐守 從四位上
左馬頭

忠盛 昇殿 刑部卿 正四位上
歌人

清(盛) 從 太政大臣

忠盛 金葉集作者
左馬頭 左京大夫
仁平三年正月
十五日卒、五十八

重盛 内大臣 正二位
小松
治承三五
并五出家、
四十二、同八
月四日薨、

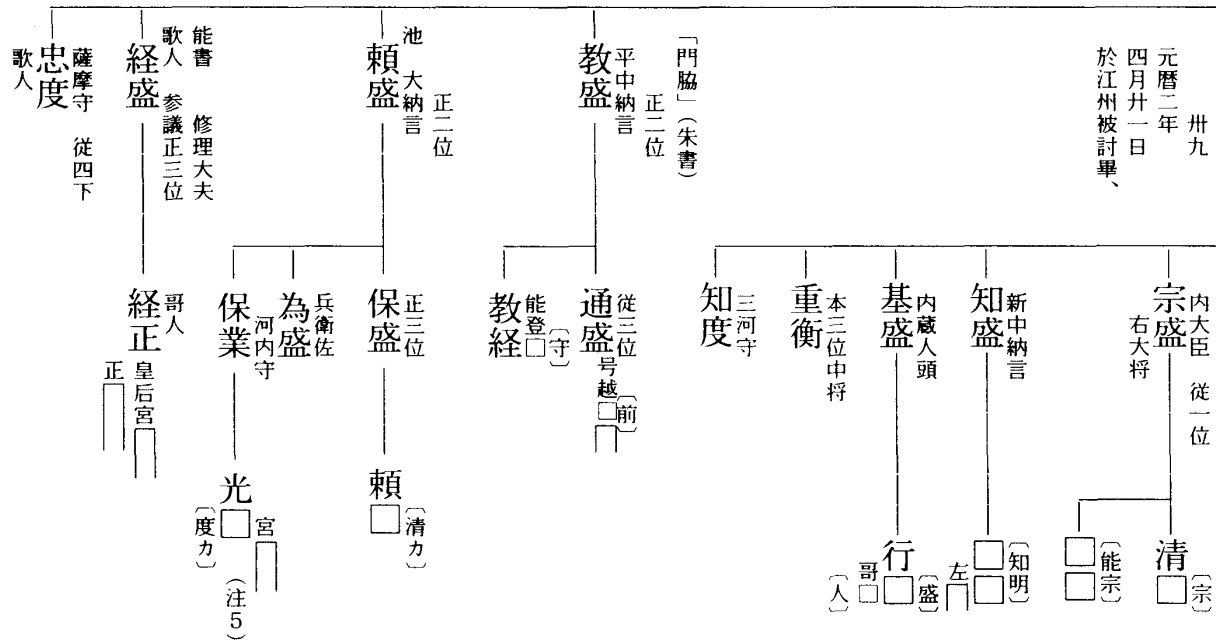
維(盛) 資(盛) 清(盛) 師(盛)
右

(注4)

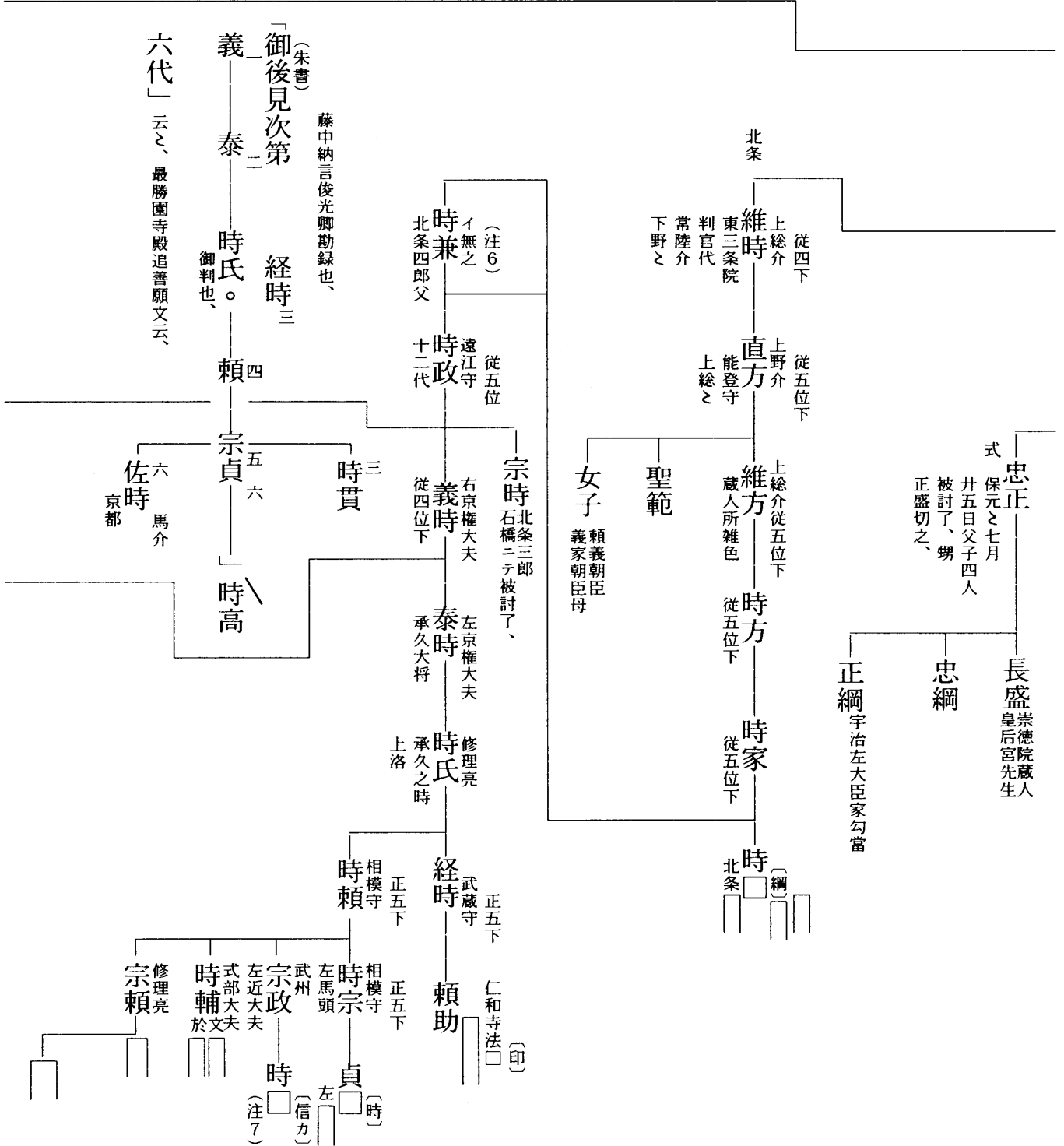
山口…入来院家所藏平氏系図について

仁安三年十一月出家
五十一
治承五之閏二月四日
薨、六十三

卅九
元暦二年
四月廿一日
於江州被討畢、



〔関〕(朱書)
右馬助
從五位



時政

遠江守 從五位下
 二代將軍外祖父
 元久二—出家
 建保三—正月七日卒、七十八

義時朝臣

相州 右京權大夫
 陸奥守 從四位下
 元仁元六月十三日卒、六十二

泰時

修理亮 式部丞 武州
 左京權大夫 正四位下
 仁治三—六月十五日卒、六十

時氏

修理亮
 寛喜二—六月十八日卒、廿八

経時

(監)
 左近大夫將軍
 武州 正五位下
 寛元四—閏四月一日卒、廿三

時頼

左兵衛尉 左近大夫將監
 相模守 正五位下
 康元二—十一月廿三日出家、卅
 弘長三—十一月廿二日卒、卅七

名越

貞時 号最勝恩寺
 左馬權守
 相模守 正四位下
 應長元十升六卒、四十一

時尚

右馬助
 相模守
 應長元九升三卒、

朝時

遠江守 正五下
 式 承久之時上

光時

親時

親盛

時章

公時

時

備前守
 藏人 使

時長

長頼

宗

時幸

時春

通時

時兼

女子

公朝

宗教

教時

宗教

時基

宗基

重時

從四上 (マ、)

時繼

仲時

長時

宗政

久時

時茂

時範

時景

時治

塩田

時景

國時

時治

女

武蔵

越後

駿河

(守)

(注8)

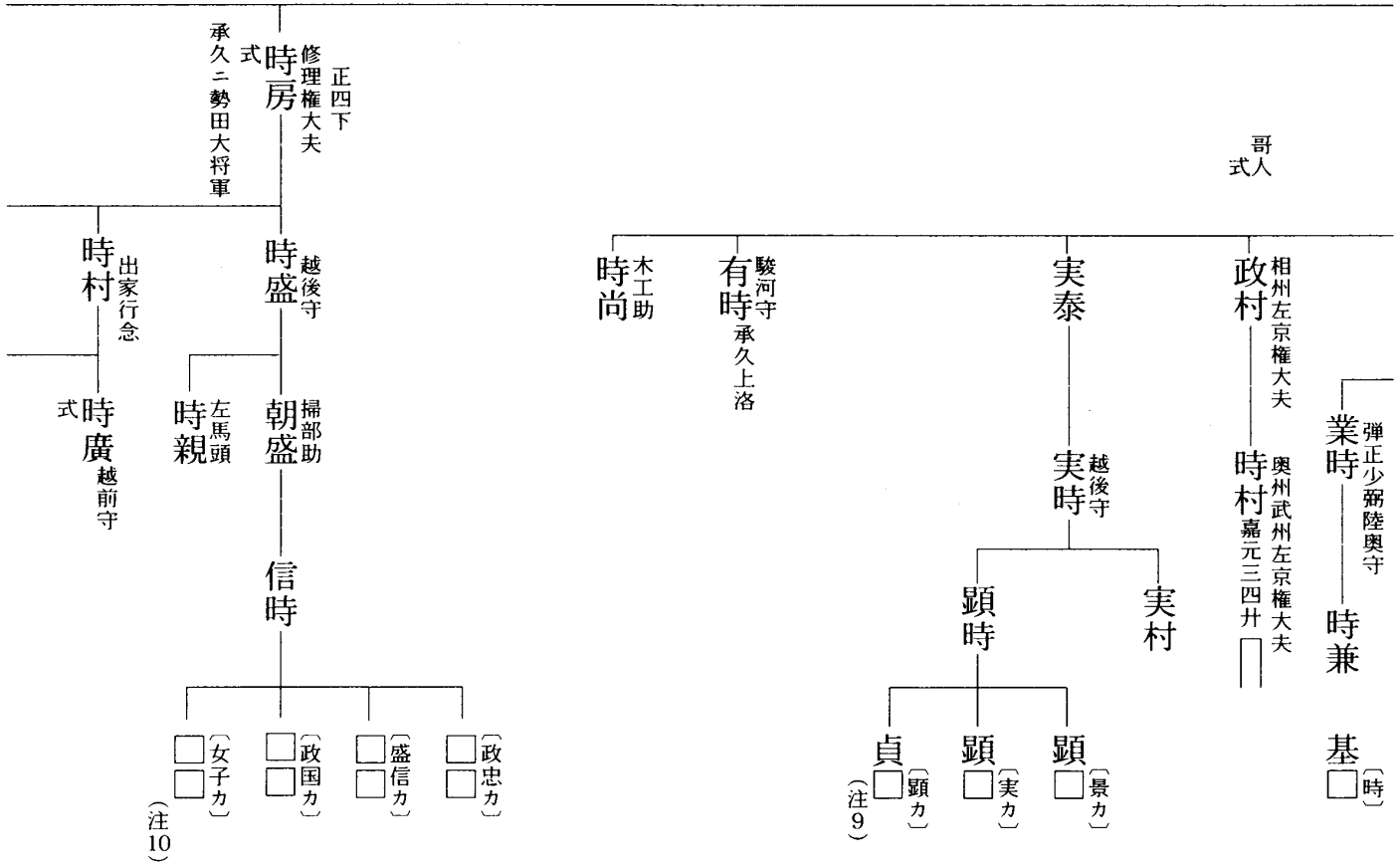
時房
 式部丞 修理亮
 相州 修理権大夫
 正四位下
 仁治元正月廿四日卒、六十六

重時
 式部丞 駿河守
 相模守 陸奥守
 從四位上
 弘長元十一月三日卒、六十四

時宗
 左馬頭 相模守
 正四位下
 弘安七—四月四日卒、三十四

宗政
 右馬頭 武州
 弘安四 八月 卒、廿九

宗宣
 奥州
 正和元六十二卒、五十四



從二位
女子
右大将家室
二代將軍母儀
嘉祿元—七月十
一日薨、六十九

私云兩國司次第

重時 政村 政義 宗政 業時 宣時奥州
時村 宗宣左京大夫 奥州

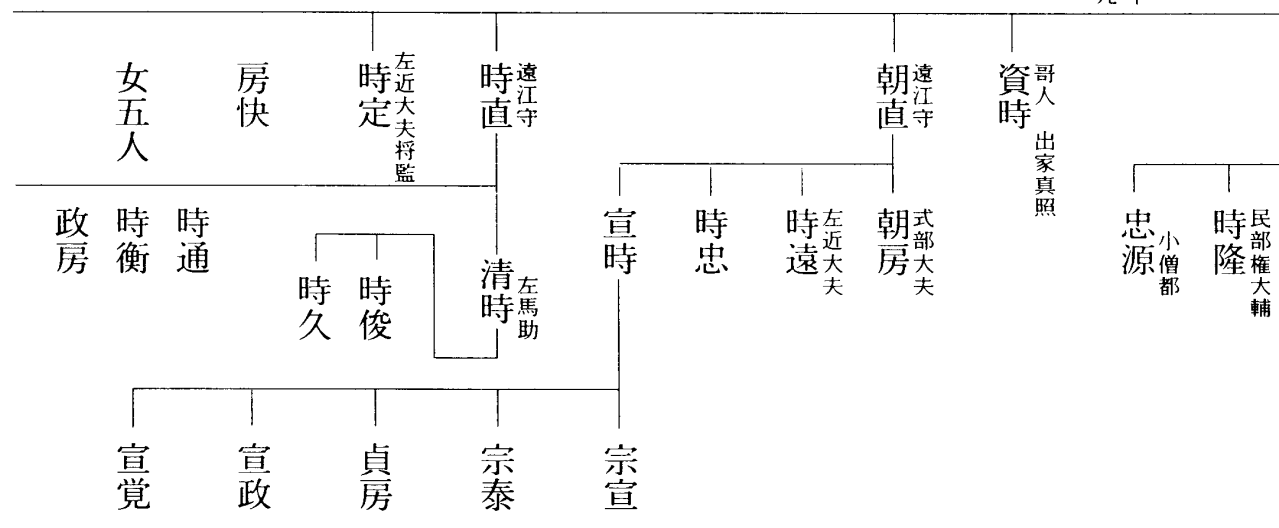
六波羅守護次第

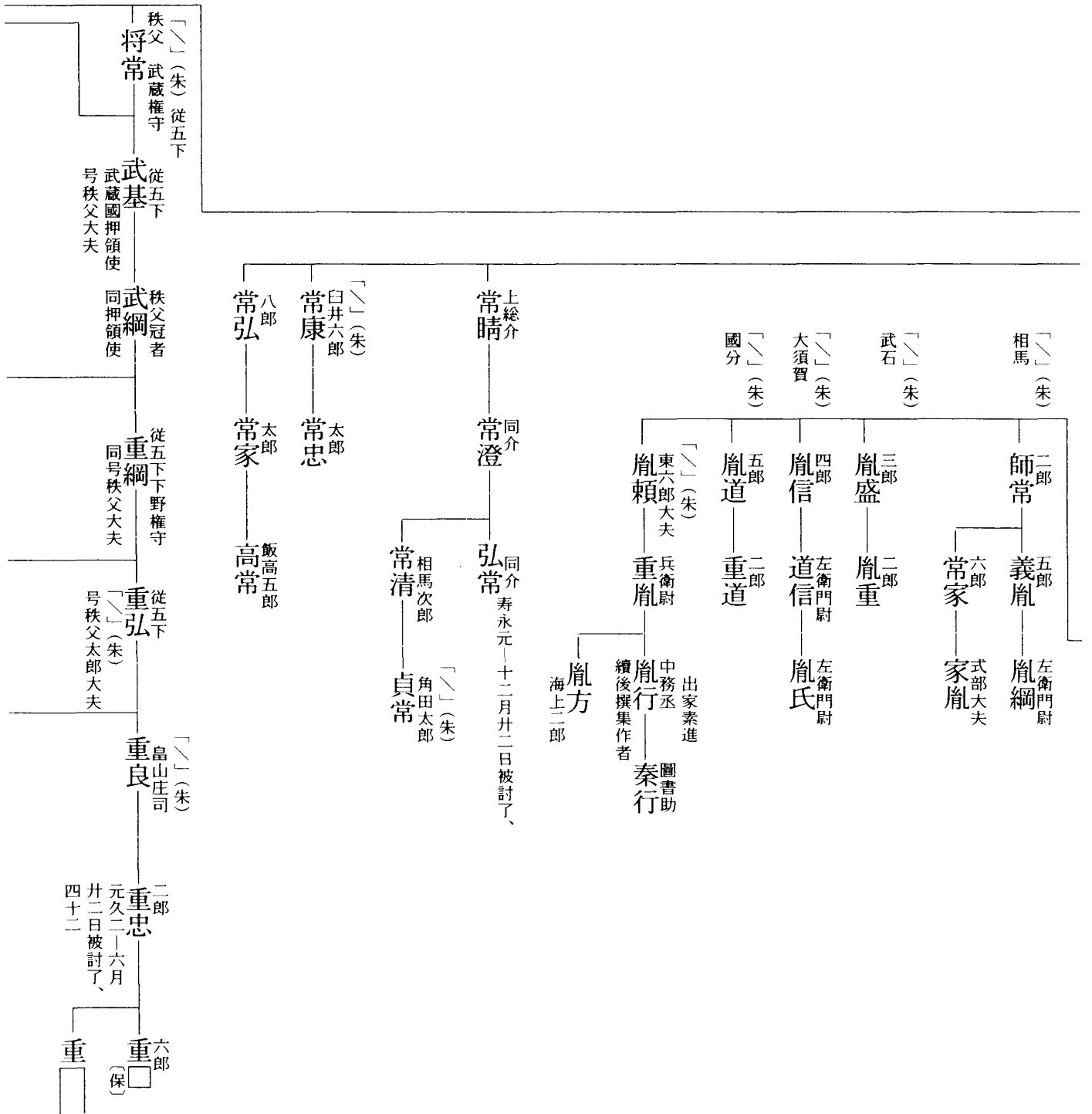
重時 長時 時茂 宗政 時村 兼時

尚時武州 宗方右馬助備前 基時 時信

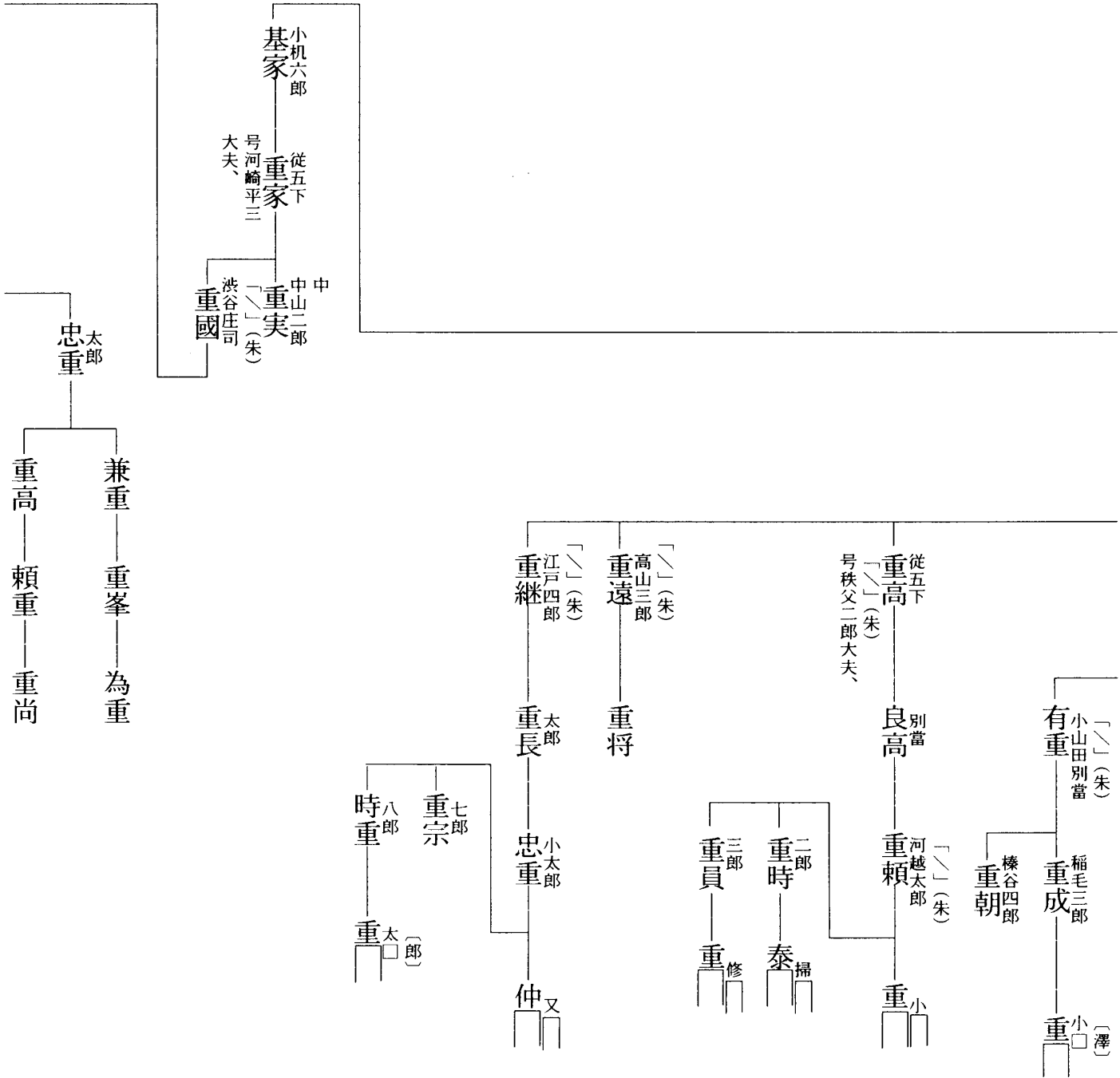
光時南後後 (越力) 時輔 時國 兼時後北 盛房丹波守 宗宣

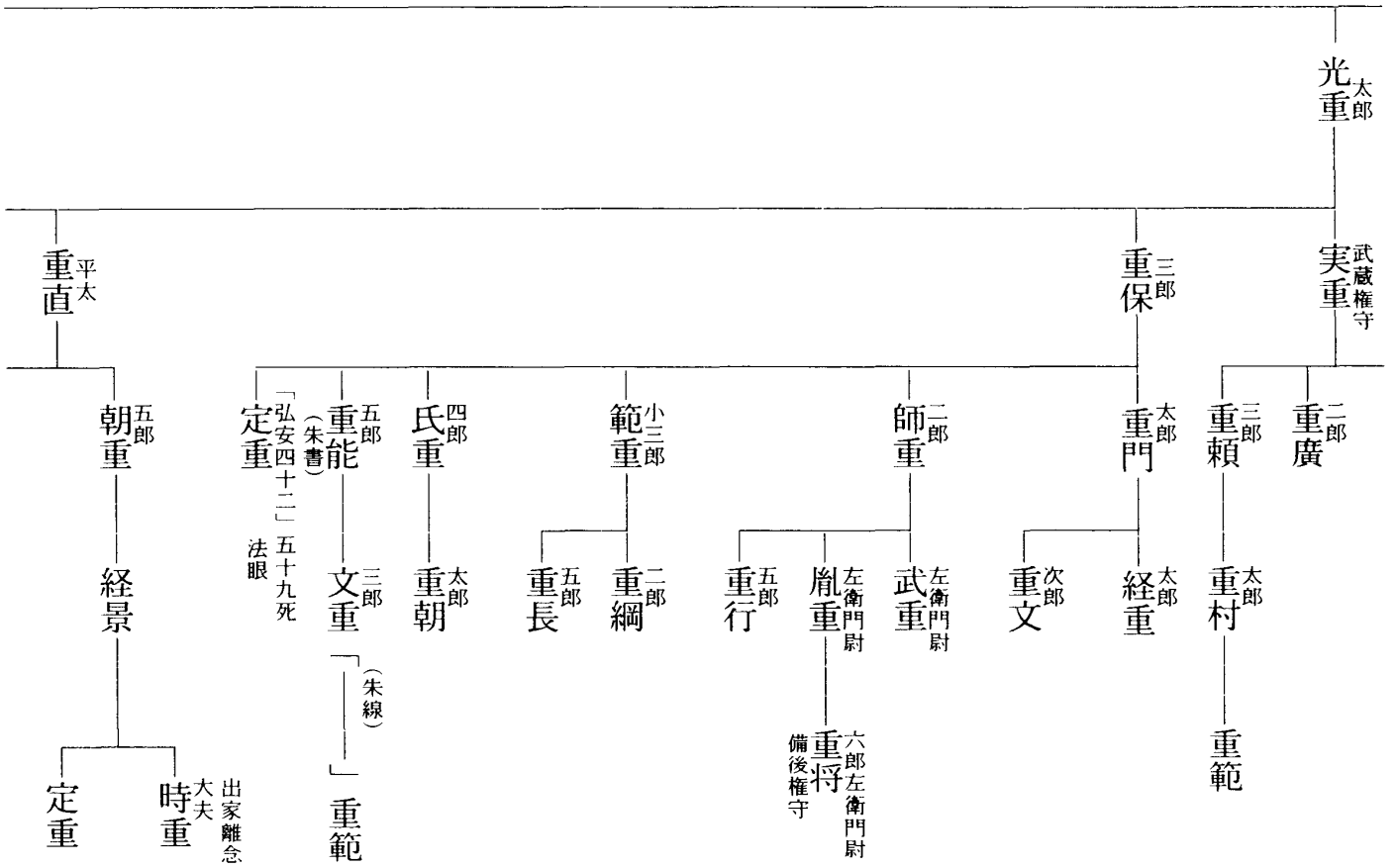
良望アリ
繁盛(マ、) 從五下 六奥權守 維將從五上 肥前守 維時貞盛為七男、

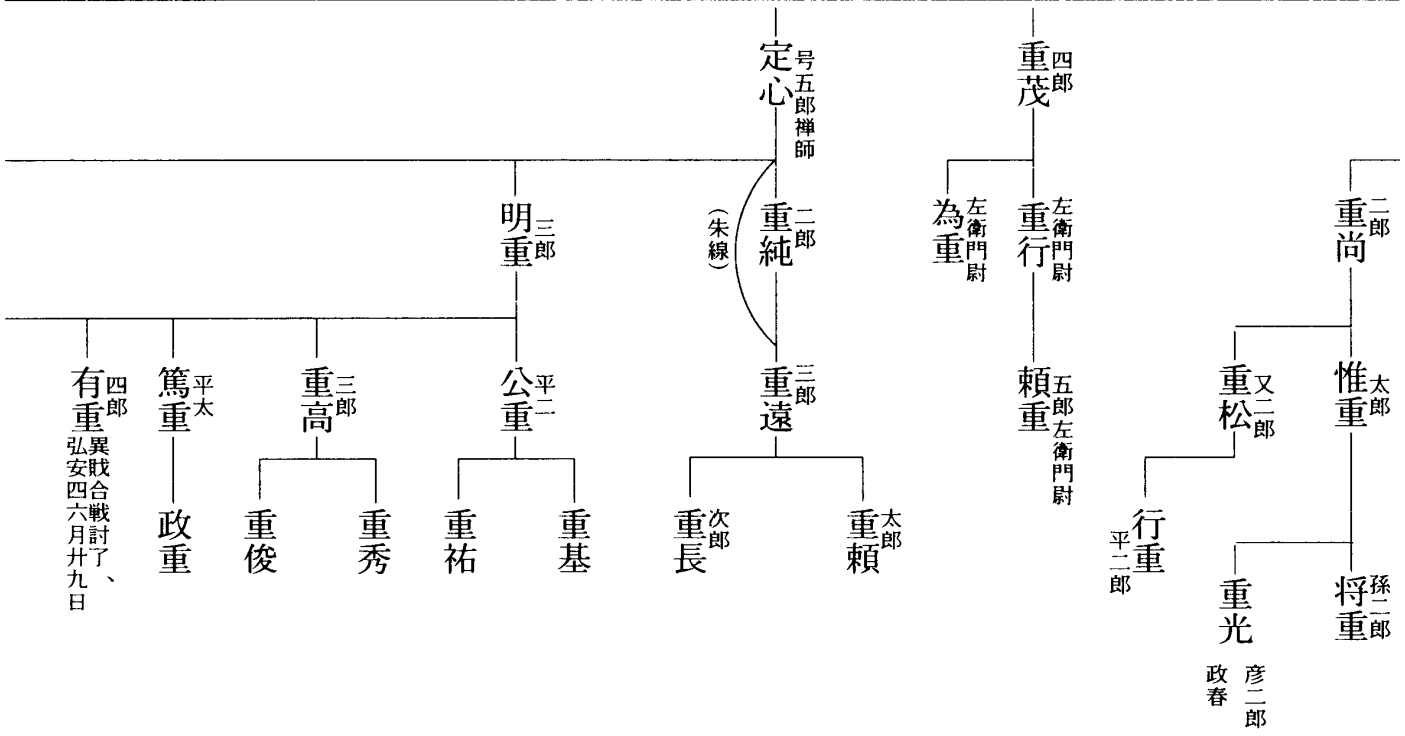


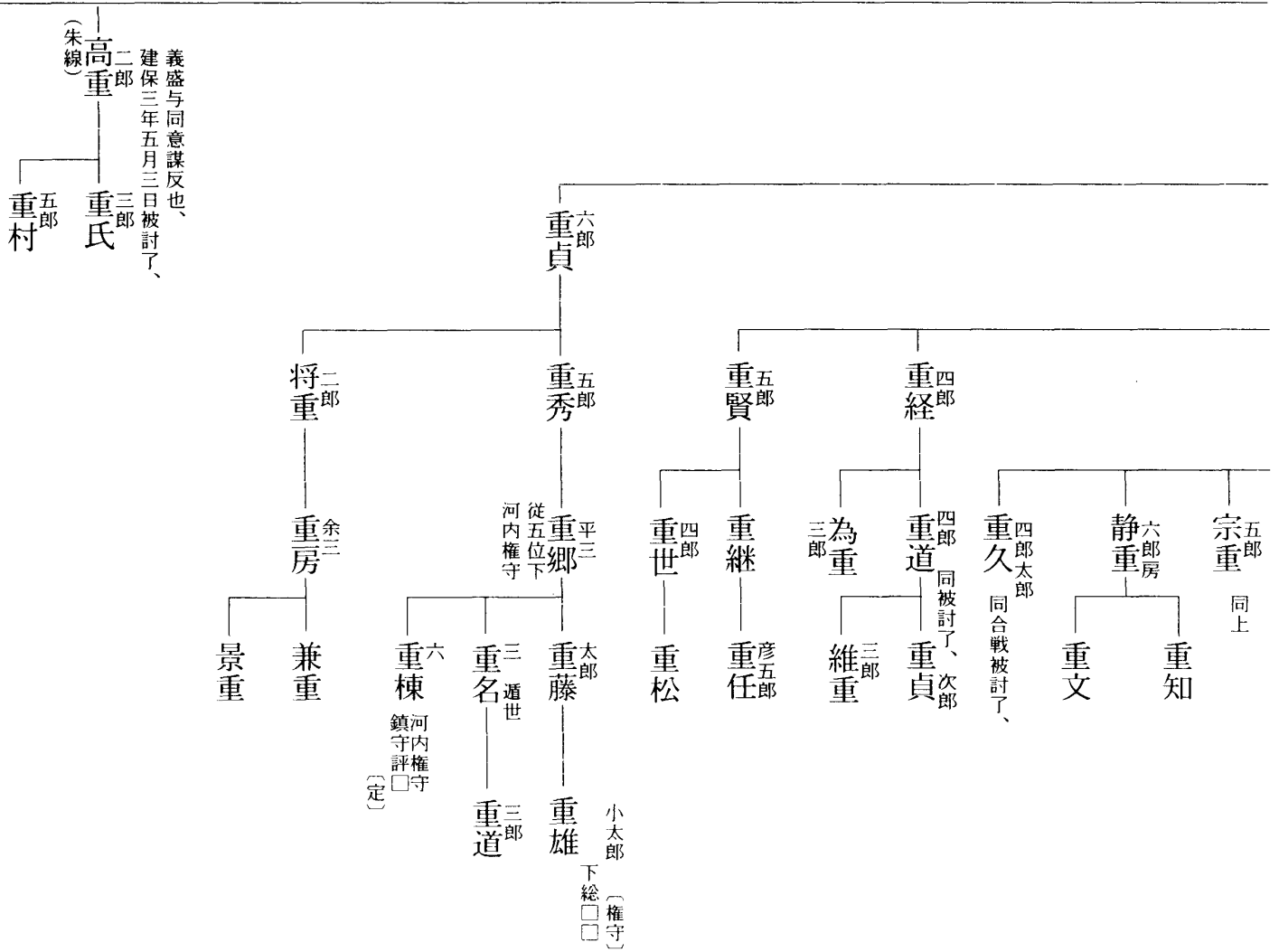


山口... 入来院家所藏平氏系図について

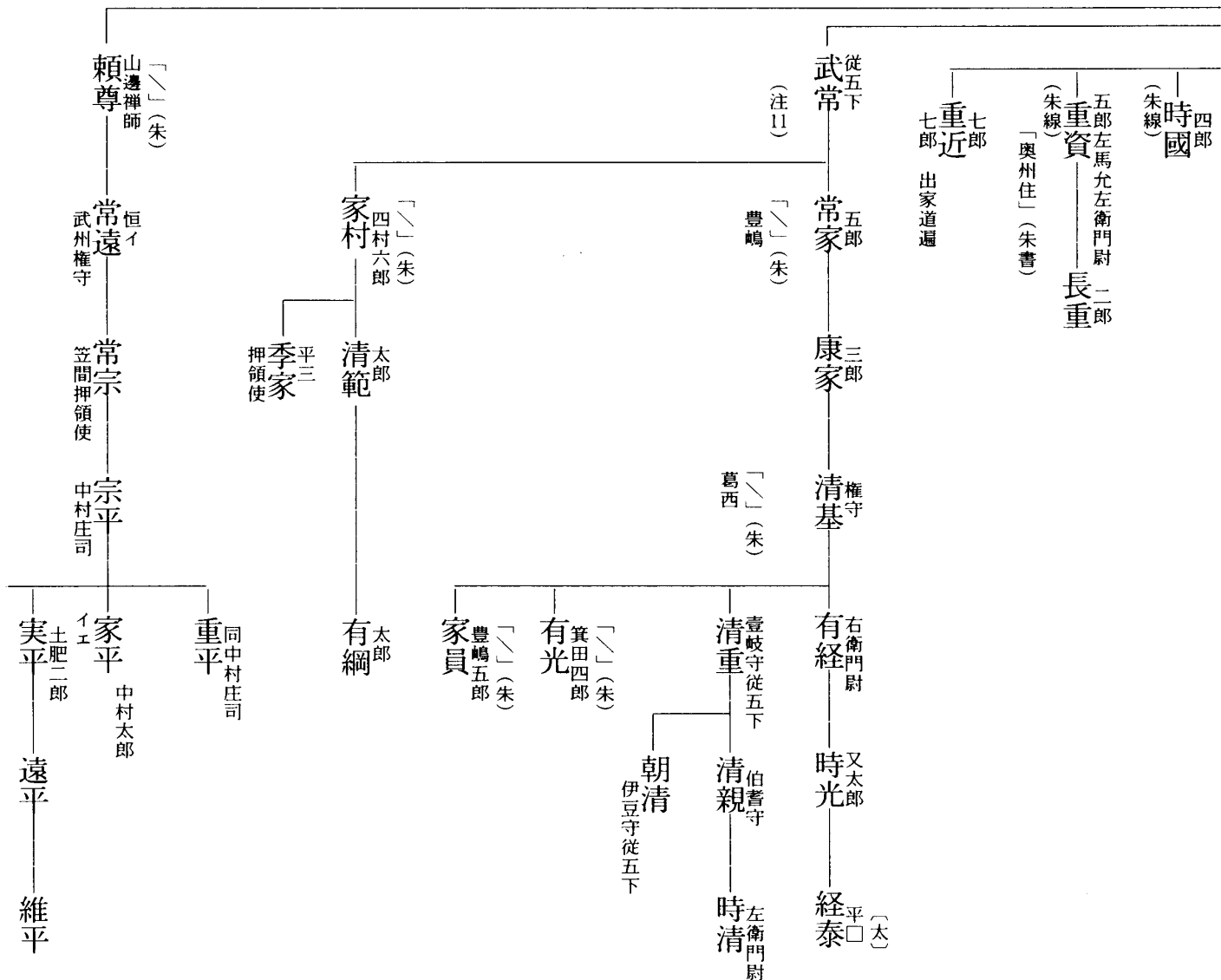


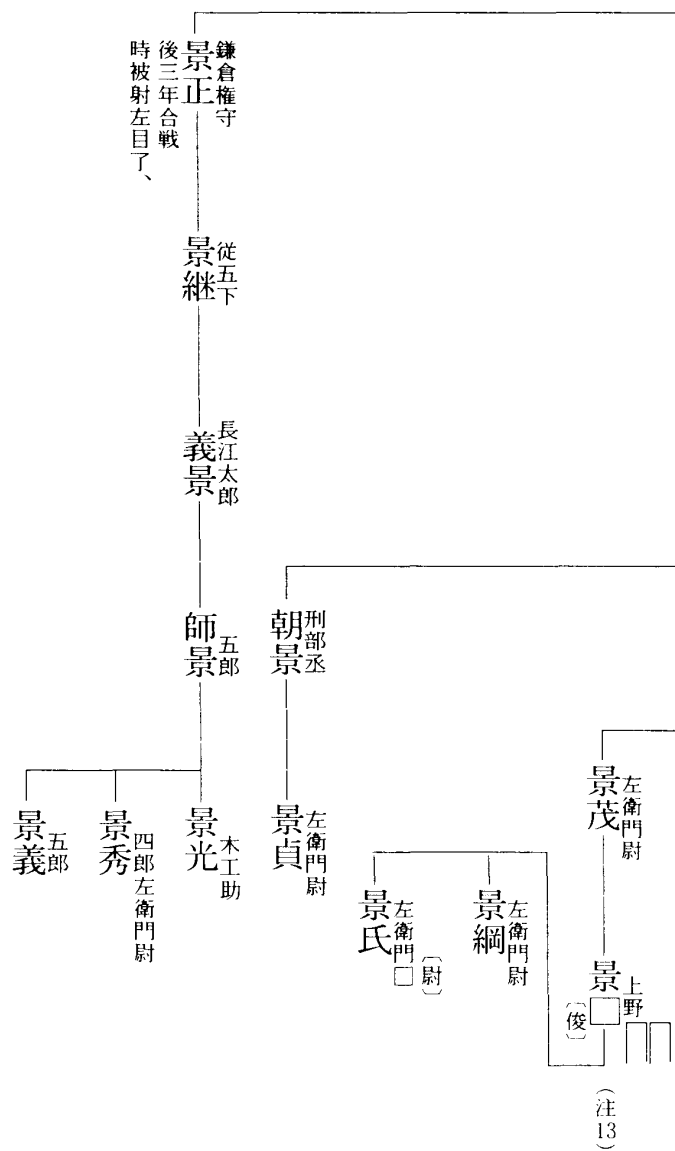






山口…入来院家所蔵平氏系図について





一 天皇 スヘラキ

一 延暦七年中納言田村麻呂於大將軍東夷被征

利朝 号二条大納言 — 利仁 — 利平

利宗事 号田村將軍 利宗

陸奥松世郡田村庄生 ス、七歳花洛上、十三歳理髮、異名辻五郎利宗云々、清水寺建立之仁也、奈良坂金ツフテ良尊依誅伐勸賞蒙將軍之宣旨、又伊勢國鈴鹿山立鳥子 (帽脱カ)可擷取旨蒙宣旨、彼女盜梵天王薄瀨山神三女也、又近江國蒲生庄西黨高丸 (可討カ)由蒙宣旨、又陸奥四郎將軍光宗討之欵、大嘗会大頭

(以上、オモテ)

注

- (1) 田中稔「野津本『北条系図、大友系図』」(『国立歴史民俗博物館研究報告』五集、昭和六〇年)、岡野友彦「太田喜代子氏寄贈福富家文書について」(『皇學館大学史料編纂所報』一五四号、平成一〇年)。この野津本『北条系図』(野津本と略す)には、鎌倉後期(弘安九年11286、弘安一〇年、嘉元二年11304)の書写奥書がある。
- (2) 重勝は、重知(四代重基のいとこ)の子息だが、南北朝前期の康永二年(1343)二月、重基から讓状を得て所領を相伝(入来院家文書六九号、『入来文書』所収)、その養子となり、入来院家当主(五代)となっている。
- (3) 成る程、『尊卑分脈』(四、『国史大系』六〇卷下)、前田家本『諸家系図』、正宗寺本『諸家系図』(以下、それぞれ尊卑分脈、前田家本、正宗寺本と略す)などでは貞盛―維将―維時の順になっている。
- (4) これら重盛・宗盛・知盛・基盛の子息名の推定は、系図「式番」②のほか、特に尊卑分脈による。
- (5) 前田家本に、保業の子息として「光度 宮内大輔」が見える。
- (6) この箇所、前田家本などでは時方―時家―時政の順である。
- (7) 前田家本では宗政の子息に「時信」が見える。
- (8) ここで「宗政」とあるが、尊卑分脈、前田家本、正宗寺本、野津本などでは「義宗」と見える。
- (9) 顕時の子息だが、本系図「五番」のウラ(北条氏系図草案)では顕景・顕実・貞顕の三名を記し、正宗寺本でもこれら三名が見える。

(10) この辺、信時の子息たちで、「五番」ウラや「式番」②によるが、うち政忠は正宗寺本にも見える。

(11) 以下、豊島系図の部分だといえる。近年、たとえば西岡芳文氏は、越後中条家文書「桓武平氏諸流系図」や「山門氏系図」所収豊島系図(山門文書、鹿児島歴史資料センター黎明館現蔵)の記事を詳細に比較検討し、それらに見える誤写など正そうと考証している(「武蔵豊島氏・江戸氏関係史料の紹介と検討」、東京都北区教育委員会『文化財研究紀要』十二集、平成一一年)。本系図「五番」において豊島系図の部分は、的確な記事であり、さほど訂正のための考証は要らなそうである。

(12) 義村の子息三名の名前は、ここでは下部が欠けているが(残画あり)、「式番」②では完全に記されており、その記事も正確だといえる。『統群書類従』卷一三八(六輯上)所収「三浦系図」参照。

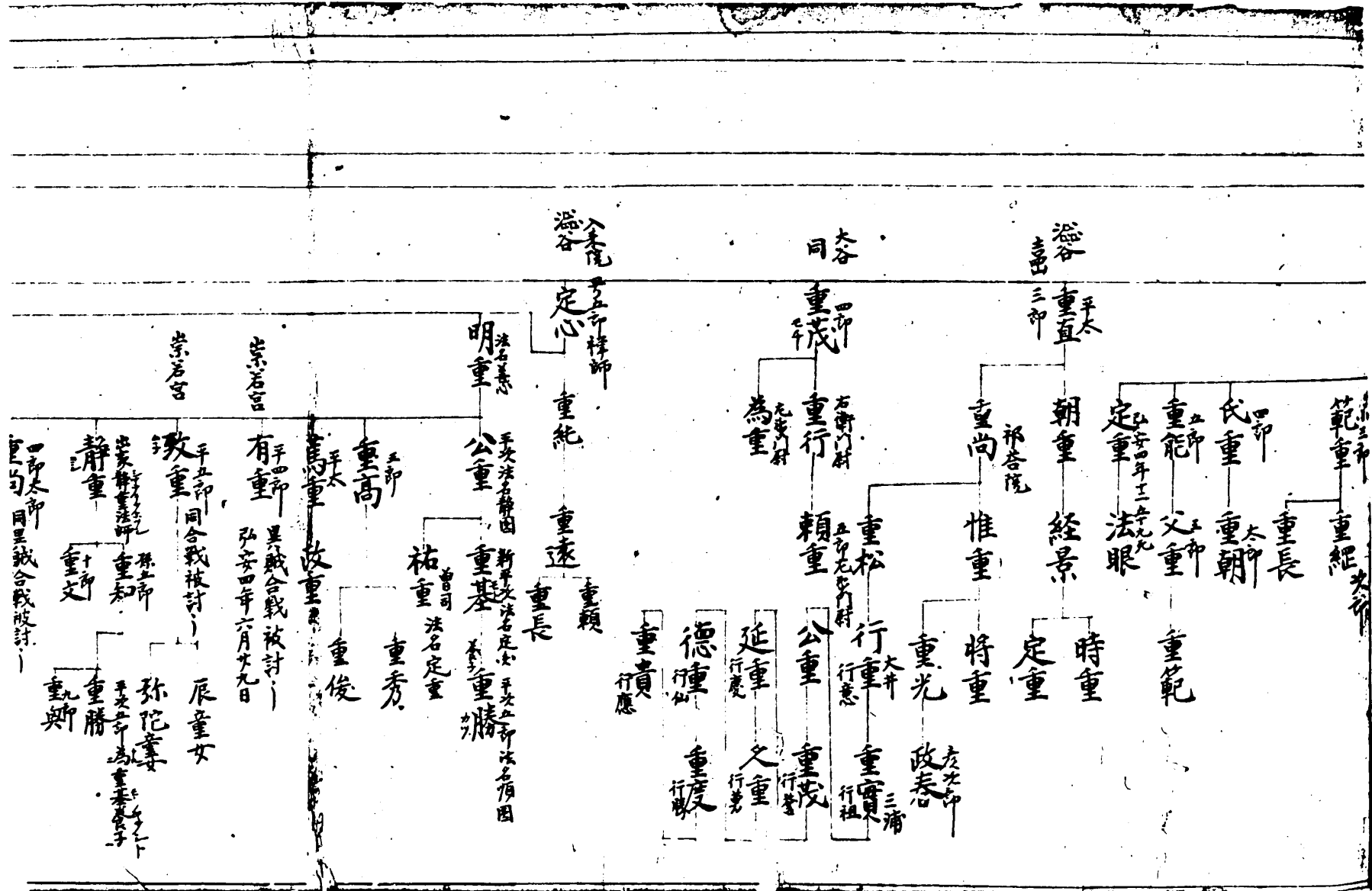
(13) 例えば『統群書類従』卷一三八(六輯上)所収「三浦系図」では、景茂の子息として「景俊 上野介」が見える。

(補注1) 因みに都城島津家所蔵文書は『宮崎県史 史料編』(中世一・二)に、山口家文書は『鹿児島県史料』(旧記雑録拾遺 家わけ六)に翻刻・刊行されたが、これら系図ロハは、そこに収録されていない。嘗て現地調査で拝見した。

「付記」最近、相次いで鹿児島の入来院家を訪ね、あらためてこれら系図の原物を調査した(二〇〇一年二月、一〇月)。写真では特に判読困難な、焼損のため黒ずんだ部分、薄墨や朱で書かれた部分(文字、合点、系線など)、紙継目の位置、寸法を確かめるためである。二〇〇一年一〇月末記



[図1] 系図「五番」(入来院家所蔵)の冒頭部分



[図5] 都城島津家所蔵「平家系図」の薩摩渋谷氏（祁答院氏、入来院氏）の部分